

南会と高倉宮以仁王

# 南會の神秘境

## 南會と高倉宮以仁王

文 小林金次郎  
 雷 熊田 大三

る探を

仁王は平家の滅亡を謀り給はれたが成らず、奈良の春うさせ給ひ流れた矢に當つて、隠しさせ給ふた。そのまじき、實は越後の領土を討つて、越へ行く途次として南會津へ入られたわけである。

供奉の面々には「尾中納言」「藤原朝實」「渡部長七郎」「西院寂了」など何れも今日地方に数ある人々があつた。

宮は道を田島より——高田——坂下——津川——新瀧へと向けた。田島より高田へ行く途中柳津より石川冠者有光の軍二百餘騎の襲撃に遭ひ、追はれて引返し伊南村より伊北へ北上したものである。かくて「只見」に近く長瀬の里にて激戦をなし給ひ、有光を倒して「只見」に入りこの先叶津より「八十里越」を越えられて次第に越

### 宮に因める伝説の地

- 1 室山神社の義仲の書
- 2 竹杖原と小柴栗
- 3 紅梅御前の詞
- 4 御側ヶ原と櫻木姫
- 5 西方院寂了と西福寺

後へ向はせられたものである。

**宮に因める傳説の地**

高倉宮以仁王の南會津における傳説と、その關係せる土地は随分多い。

然しながら一體何れの地より南會津に入られて来たかは不明瞭であるらしい。

で色々傳説や土地の關係などより謀り、私一人の豫想を許して下さるならば、私は宮は恐らく日光より寂光院、真見臺の地を通り野州原御前地を経て川俣へ抜かれこれより湯の花温泉へ出られて始めて南會津の地を踏まれたものであらうと考へられる。

1、室山神社の義仲の書

前にも述べた様に湯の花より西一里許りのところに室山神社があり、こゝに木曾義仲の祈願の書がある。で義仲は宮のこゝにあるを聞いてその後を追つて来たものであらう。

2、竹杖原と小柴栗

湯の花温泉から田島への道順として約三里、「竹杖原」或は高杖原といふ地がある。

昔、宮がこの地を過ぎ忠ひ道に難儀し給ふとき村の一翁は道路より「小柴栗」といふ枝に實を持つてる樹を切つて竹杖に代へて進め参らせれば宮は怪しんで問へば「これは小柴栗と言ふものに候」と言ふ宮はそこで一首を作り

陸奥の南の山小柴栗  
 大宮人は知らで過ぎゆく  
 とて翁へ贈へ給ふたといふ。

これより中山峠を越えて羽黒の里を過ぎ、田島の里へ急ぎ給ふたものである。

3、紅梅御前の詞

宮は人多き日光街道をさけて道を北へ取り給ひ「戸赤」へたどり着き給ふ。これより急ぎ大内へ向はせ給ふ。この「戸赤」には高倉宮姫、「紅梅御前」を祀つた一小祠がある。溪流を一つ隔て、今も只一人淋しく歌をなぐさみ給ふとか。

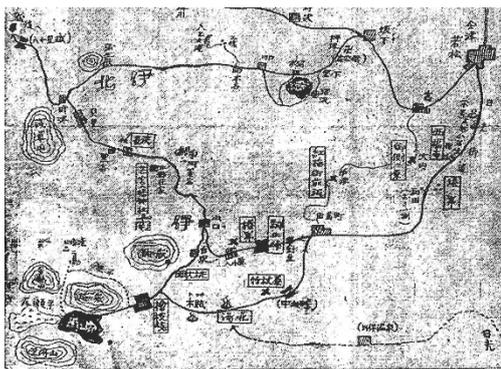
4、御側ヶ原と櫻木姫

大内の里へ着かれた宮には又しても淋しきことが續かれた。それは「櫻木姫」を喪つたことである。今街道の側に櫻木が一株あり、傍に石碑が一つ立つてゐる。櫻は數年か宮と離れし悲しみをうす紅色の花葉に托して飛ばせしとか、今その古木の枯れて新しき櫻を植たるも寂しき限り。

5、西方院寂了と西福寺

大内まで行かれた宮はこゝで柳津方面から来る石川冠者有光の襲撃を知り給ふ。

然る前にこの大内の里の一部「小沼崎」といふ秘境の地を愛されてゐたが、こゝを捨て、ゆくに忍びず、供奉の一人である西方院寂了をして草庵を結ばしめこれを高倉院と稱された。かくてこの地を追はれるごとく元來た道を引返されたが、この高倉院こそ今の西福寺である。



高倉宮以仁王行記附圖

# 南會の神秘境

南會と高倉宮以仁王(下)

文 小林金次郎  
書 熊田大三

## る探を

8/29 記事

南會と高倉宮以仁王(下)

6 駒止峠の謎

7 椿へつりの椿花

8 尾瀬大納言

と尾瀬沼

10 長浜の戦ひ

と有光の死

11 八十里峠を

越えて越後へ

12 若宮

八幡神社

6. 駒止峠の謎  
田島まで引き返された宮は道  
を右に取つて鷺島、米澤、金井  
澤を経て針生峠を越えて行き給  
へばいよ／＼深く遠く遠くしき駒  
止峠へかゝる、上下五里、高さ  
四千尺に餘るこの峻しき道には  
驚々都より乗り來し名馬もその  
足を痛め、頂きに来る頃はもう  
一歩も出ず宮もほと／＼に困り  
給ふた

それよりこの名無き峠には駒  
止峠と言ふ名が呼はれる様にな  
つた

7. 椿へつりの椿花

苦しき一夜を明された宮は驚  
の聲にまづ眼をさませば又今日  
は暁しき七月の空は暗れて、説  
く山々の緑は如何に宮の心を清  
めたことであらう。駒の脚もは  
や癒えて靜かに靜かに峠を下り  
給ふ。

又も来るか上駒止の雨よ  
駒をとよめて故郷見れば  
雲にかくれて見えもせず  
草につかれて笠笠しげば  
待てど二日の月さへ見えぬ  
暗れてたもれや

駒止の謎よ

(駒止小唄)

これより次第に麓へ下られ給ふ  
時は治承四年、高野川の南岸  
を通り給ふとき宮の行く手にか  
しこまるはこの村「入小屋」の  
村長「多右衛門」、宮の被れを  
休めんと手折る心の紅椿、宮手  
に取りて微笑みて  
懸なりし高野の山の玉峰  
都の嶺に逢ふ心地して  
と涙み給ふ。けに願かかしの涙

山里よ。疾しき旅の衣を振り  
給ふ宮の心は如何に惚惚然きも  
のがあつたらうか。

8. 尾瀬大納言と尾瀬沼

山口の里へ来て見ればはや越  
後へゆくは道一筋、遙々お伴れ  
た尾瀬大納言はもうこれ迄來れ  
ば安心と思つたか、或は病を得  
てお伴をする事を得なくなつた  
か、その途はよく分らないが、  
一人道へ南に宮に別れを惜し  
て尾瀬へ下る、傳へ聞く尾瀬の  
風光の聞きしにまさるのに驚き  
これを生涯の地と定めて遂にこ  
こに其の命をなす一生を送つた  
この尾瀬大納言の住みしより  
こゝを尾瀬と稱する様になつた

10. 長濱の戦ひと有光の死

宮は山口を設して急ぎ只見方  
面へ向はれ給ふに、先に柳津よ  
り馳騁して來た石川冠者は道を  
更へて先取りしてゐたのか、或  
は襲撃すると思つてこちらの道  
に待つてゐたものか、尾瀬の里  
に於て突然宮の軍に矢を放つた  
のである。万才橋を切り落した  
有光は戦兵を以てしきりに宮を  
要請して憐れましたが天は決して  
悪に味方せず有光は宮の方の矢  
に當つて脆くも戦死してしまつ  
た。有光の塚は長濱の部落の左  
手の林の中にある。

道を急がれ「洗院上人」出  
生地として誦へられる「黒谷」  
をすぎ只見村の「上の渡場」を  
越え給ふ。

時は八月四日、宮はしばしこ  
こに休息されつゝ、東に高き淺草  
岳を登られて詠まれ給ふ。

富士を見ぬ人に見せばや陸奥  
の淺草岳のみねのしら雪  
休息せしは船尾十三郎の茅屋で  
その日の中に更に足を早められ  
越後と柳津方向へゆく沼田街道  
の岐路「叶津」に着き給ひ、村の  
小司馬の家へ泊りなされ給ふ

11. 八十里峠を越えて越後へ

八月五日未明、宮には又慌し  
くこの家を出て給ふ、これより  
叶津川に添ひて八十里峠へ向ふ  
この日は彼等の誠忠による十八  
人の強き若者に守護されつゝ宮  
は如何に氣強く感じられたであ  
らう、けれども路は仲々峻しく  
して折からの暑さも重く、  
江戸澤十郎左右衛門の背に負  
江れつゝ「大山尾」に箭く頃  
宮も大分疲れ給ふ、宮を護る人  
人は何れも赤飯厚き人々であつ  
たため、如何にかして宮を慰め  
を催したのである。

日は既に暮れて人家なし  
升なく一同は木の下に草を敷  
いて夜を明すこととなつた、こ  
の地を「駒止」の地と名付けら  
れる。

次の日は「清水平」に夜を明  
し御座を設けて御泊りとなる、  
いよ／＼越後の國境となり越後  
の山々は又見え來る、かくて  
宮は越後に入りとなりたが  
今その邊りに鞍掛、鳥帽子刀掛  
等の名稱の地のあるは皆宮の行  
路の途次に因めるものである。

これで南會津における高倉宮  
以仁王の行踪と傳説の土地は終  
つたが、かくして見れば以仁王  
が南會津へ足を入れられたこと  
は決して空説ではないと思ふ。  
深く深く検べることにより宮  
の在跡は確に興味深いものがあ  
ることを考へることが出来る。

12. 若宮八幡神社  
宮は難を越えてやがて越後へ落  
ちのびられたが、こゝに山口の  
先、八幡の二軒在家に高倉宮以  
仁王を祀る若宮八幡神社がある  
出羽の城主「戸澤大和守」は寛  
政中より天保六年頃迄年々重臣  
を派して代拜せしめたと言ふ、  
然しこれは必ずしも以仁王がこ  
の地に没したことを意味するも  
のではないと思ふ、現在に於て  
も八幡様などは崇拝する意味に於  
て建てられたものであらう。

スケツチ 淺草山



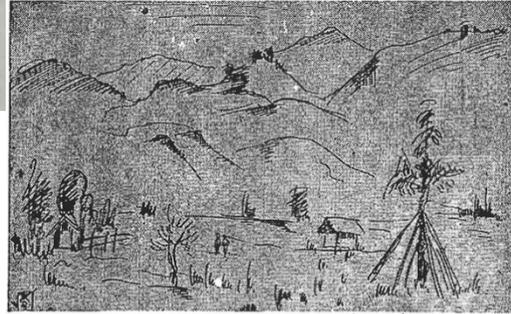
「安宮清水」  
檜枝岐温泉観光協会  
提供

### 安宮清水

会津地方のさまざまな地域に高倉宮以仁王(後  
白河天皇第一皇子)の伝説が残されている。  
安宮清水もその一つで、高倉宮以仁王が中仙道  
を下り、尾瀬を経て檜枝岐に落ち延びて來たとい  
われている。

その時に供の一人が、冷たい清水を見つけ宮の渴  
きをいやす為に差上げたというので、この清水を  
安宮清水を呼ぶようになり、今でも当時と変わらぬ  
清らかな水が湧き出している。

檜枝岐村



画 淺草山